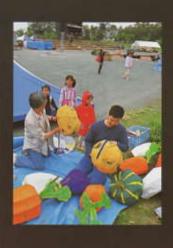
## まちづくり①















たどる。

江戸末期、松浦武四郎による東蝦夷地の探検、 アイヌの人たちが自然とともに暮らしていた時代。 コロボックルが十勝の森を駆け巡っていた時代 が、夢の中でコロボックルに導かれ、十勝の歴史を

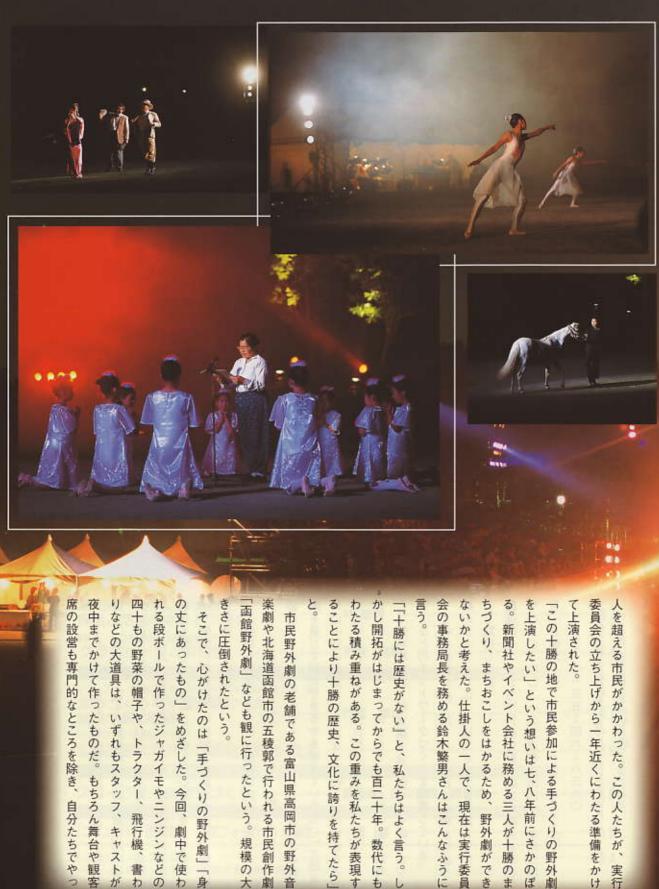
明日から夏休みを控えた終業式の日、

一人の少女

た。 両日、帯広市の緑ヶ丘公園の多目的広場で上演され 表現した野外劇「十勝野はるか」が七月六、七日の 十勝の歴史を五幕九場、歌、踊り、芝居、朗読で

空港ができ、鉄道が開通する。発展をつづける十勝 け、苦しみながら亡くなる少女。戦後、復興のとき。 れる愛馬と別れを惜しむ少年、空襲で機銃掃射を受 歌した大正時代。そして戦争の時代、軍馬に徴用さ 界大戦で豆成金やでんぷん成金が空前の好景気を謳 と開拓団が十勝各地に入植した明治末期、第一次世 よる開拓事業の希望と挫折、全国各地からぞくぞく 十六年からはじまる依田勉三たちが興した晩成社に

ルキー号。これにスタッフが加わり、総勢四百五十 代表、帯広市長も参加し約百八十人、それに馬のシ リーマン、主婦、カメラマン、自衛官、NPO団体 承している帯広カムイトウボボ保存会の面々、サラ 役の子どもたちをはじめ、アイヌの舞踊や歌謡を伝 公演は今年で三回目。キャストは、コロボックル

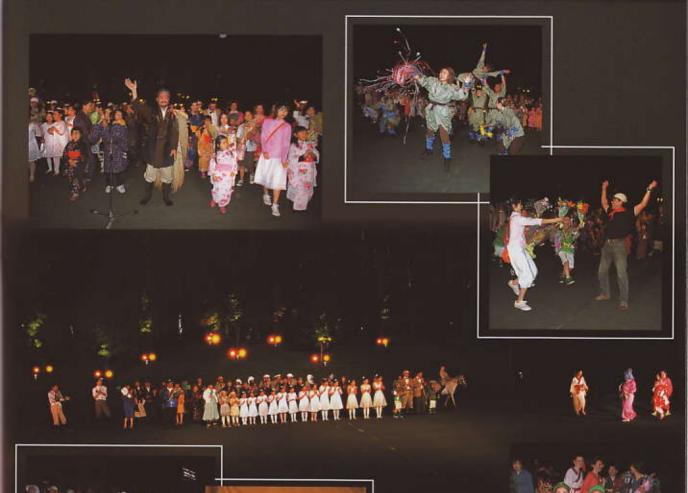


て上演された。 人を超える市民がかかわった。この人たちが、実行 委員会の立ち上げから一年近くにわたる準備をかけ

会の事務局長を務める鈴木繁男さんはこんなふうに ないかと考えた。仕掛人の一人で、現在は実行委員 ちづくり、まちおこしをはかるため、野外劇ができ る。新聞社やイベント会社に務める三人が十勝のま を上演したい」という想いは七、八年前にさかのぼ この十勝の地で市民参加による手づくりの野外劇

ることにより十勝の歴史、文化に誇りを持てたら わたる積み重ねがある。この重みを私たちが表現す かし開拓がはじまってからでも百二十年。数代にも 「「十勝には歴史がない」と、私たちはよく言う。し 市民野外劇の老舗である富山県高岡市の野外音

の丈にあったもの」をめざした。今回、劇中で使わ りなどの大道具は、いずれもスタッフ、キャストが 四十もの野菜の帽子や、トラクター、飛行機、書わ れる段ボールで作ったジャガイモやニンジンなどの 席の設営も専門的なところを除き、自分たちでやっ 夜中までかけて作ったものだ。もちろん舞台や観客 そこで、心がけたのは「手づくりの野外劇」「身



を受けてくれた。 もう一つは、地元に住む専門家の参加。この地の 大が西洋民宿を営んでいた。清水町には、作曲家の 大が西洋民宿を営んでいた。清水町には、作曲家の 大が西洋民宿を営んでいた。絵本作家の本田哲 也氏も同じく清水町に在住していた。それぞれに演 出、音楽、美術面での参加を求めたところ、快く引 ま受けてくれた。

三回目を終え、すでに、来年に向けてキャストや 三回目を終え、すでに、来年に向けてキャストや 自らのホームページのなかで、この野外劇を通じて何ができるかを考えていきたい」と語る。 して開拓写真展、歴史講演会、街づくりのプロジェクトなどのネットワークづくりを提案している。 この市民野外劇で培われた市民の連帯が帯広や十 この市民野外劇で培われた市民の連帯が帯広や十 とを期待したい。

TEL ○一五五一四八一八三八○ 目一五番地(株)トム・エンタープライズ内 で〇八〇一〇〇二一北海道帯広市西十一条南三四丁 での八〇一〇〇二一北海道帯広市西十一条南三四丁

E-mail tokachino@jp.bigplanet.com

http://homepage2.nifty.com/tokachino/

た。